

---

# Another Daily

斎藤一樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Another Daily

### 【Nコード】

N0720W

### 【作者名】

斎藤一樹

### 【あらすじ】

成華学園演劇部に所属するもう一人の男子部員、神林暦が主人公の話です。Dailyのスピノフ作品であり、同時にDailyと対を成す作品でもあります。

Dailyがラブコメの コメディー 側に傾いた作品であるのに対し、Another Dailyは反対にラブコメの ラブ に特化した作品です。

舞台はDaily本編の約二年前。暦達はまだ高校一年生です。

## Another Daily - One day of rainy season

元々は、去年の文化祭に提出する予定のものでした。なので、一応Daily本編を読んでいなくても何と無く読むことは出来ますが、出来れば本編と合わせて読んでいただけると嬉しいです。それではお楽しみ下さい。

雨が、降っている。

今は六月、梅雨の真っ只中だ。だから雨が降るのは当然なのだが、しかしこうも毎日雨がずっと流石に気が滅入る。

雨は、好きだ。しとしとと静かに降るような雨は、特に。そうした雨は、見ていると心の中のわだかまりや苛立ちを解きほぐし、そつと優しく洗い流してくれそんな気がする。

それでも、梅雨だけは別だ。梅雨ははじめじめていて、俺はどうも好きになれない。

閑話休題、日曜日の今朝に限って何故だか早く目が覚めた俺は、雨がほとんど降っていなかった事もあり、家から徒歩10分の距離にある大きな公園へと散歩に出かけたのだった。

少し歩くと雨は上がったので、俺は傘を閉じた。公園に入り、ぐううっと伸びをする。ふと花壇を見ると、たくさんの紫陽花が咲いている。色も青紫や赤紫、淡紅色等、様々な色があり、とても綺麗だ。携帯電話のカメラを起動させて、2、3枚写真を撮る。

カシャリ。

写真を撮り終えた俺は、公園のジョギングコースに入り、そこを歩きだす。うん、実に悪くない。朝の空気が美味しい。

そうしてしばらくのんびりと歩を進めっていると、少し先に一人の少女が見えた。犬の散歩をしているらしく、犬をつないだリードを右手に握っている。但し、後ろを向いているので顔は分からない。少女であると判断したのも、腰まで届くほど長いストレートの黒髪と、白いワンピースを着ている、という理由によるものだ。…もしあの少女が実は髪の長い女装したおっさんとかだったらどうしような…。

写真でも撮るか。カメラは有ることだし。

そんな他愛もない事を思いながら、尚も歩き続ける。彼女との距離が、少しずつ縮まってゆく。そして、その少女がこちらを振り向いた。

「——ッ！」

思わず、その美しさに息を呑んだ。すつきりとした一重瞼にはつきりした目鼻立ち、薄い唇——。思わず、見惚れてしまっていた。

そうして見惚れて固まっていると、彼女が口を開いた。

「あら、曆君」

「……誰？」

「こんな美少女、心当たりが——。」

「……………」

俺が所属している成華学園演劇部には、何故か美少女が多い。

理由は分らないが、何故かそうなのだから仕方がない。

まあそんな訳で、クラスメイトにはよく羨ましがられる。

そんなこんなでまあ美少女に関する心当たりはなきにしもあらず、といったところだが、やはり彼女のことはなかなか思い出せそうにない。

いや、あの顔に若干見覚えが在るような…。

「あら？分らない？」

くすくすと笑いつつ彼女が言う。…この声にも聞き覚えがある。

この声と顔から判断すると…。

「…もしかして、優か？」

「気付くの遅いよ、暦君。もしかして本当に分らなかったの？」

「悪い、全く気が付かなかった。髪型とか服が変わると、意外と分らないもんだな」

制服の時よりずっと綺麗だ、とは言わなかったけれど。ちなみに彼女は普段はポニーテールである。特に意味もなくである調になつてみた。まあ、僕もポニーテールは嫌いじゃない。どうでも良いですかそうですか。会話を続けよう。

「そうかな？」

「そうだよ」

彼女の名前は美影優。俺の所属する成華学園演劇部の部員で、俺のクラスメイトだ。誰にでも優しい性格で、男女問わず人気が高い。「美影さんはもうホント大和撫子っていうか、なんか和風美人ならぬ和風美少女って言うか、むしろ女神様だよ女神様！あの美しさと優しさは女神様の如しだよ！」

という無駄に熱い（むしろ暑苦しい）主張を、俺はクラスメイトから無理矢理聞かされた事がある。

まあ、これで彼女の人の柄についての説明は十分だろう。なんて事を思っていると、

「そういえば暦君、何でさっき私のことじつと見てたの？」

優が首を傾げながら無邪気そうな顔で言った。

「！？」

うわあ、気付かれてた！俺、絶体絶命のピンチ。あまりの不意打ちに頭がパニックに陥る。脳内でリオのカーニバルに勝るとも劣らないぐらいの大騒ぎが始まった。嘘だけど！

まあそんな状態だったので（一言で言うると混乱の極み）、つい口が滑ってポロッと言ってしまった訳だ。

「見惚れていたんだよ」

つまり、隠しておくはずだった本音を。

言い終わってから一体自分がナニを口走ってしまったか気付き、慌てるがもう遅い。優の顔があつという間に紅く染まっていく。たぶん俺の顔も同様だろう。頬が熱くなっている事が自分でも分かる。どこことなく気まずい空気が流れる。お互いに言葉をかけようとしても、何となくためらってしまう。そんな空気を洗い流してくれたのは、雨だった。

ポツリ、と頬に冷たい感触が走る。空を見上げると、今度は額にポツリ。

「と、とりあえずあそこの東屋に行こうぜ。雨、降ってきたし」

そう言くと、優は

「う、うん。そうね」

頷き、

「ほら曆君、行きましょう！」

犬のリードを引きつつ、今までの気まずい空気を振り切ろうとするかのように、東屋へと軽やかに駆けていった。慌てて俺も追い掛ける。

東屋には、俺達以外は誰もいなかった。とりあえず2人でベンチに座り、ぼんやりと雨の景色を眺める。

ちらりと隣に座る優の横顔を覗き見る。やっぱり綺麗だ。学校で普段見ている制服姿も綺麗だけど、私服姿の優は更に輝いて見える。

ザーッ…………。

雨足が強くなってきた。

俺は思考を切り替えた。このままだとさっきのような気まずい空気になるパターンに陥りかねない。その一環として優に話題を振ってみる。

「優はこの辺りに住んでるのか？」

「うん。曆君も？」

「ああ。ここから歩いて大体10分で着く位の距離だな」

「へえ、結構近いね。駅の方？」

「いや、あっちの神社の方向。優の家はどこら辺？」

等と他愛の無い話をしていると、突然

ピカッ

と空が煌めき、

ドドン！

と轟音が鳴った。

「きゃっ！」

と、可愛らしい悲鳴を上げて、優が俺の腕にしがみついてきた。うわあ。なんか柔らかい2つのものが腕に押しつけられている。…その柔らかいナニかの正体については、深く考えないことにした。雷鳴が鳴り響くたびに、優はぎゅっとしがみついてくる。俺はそのたびに理性を総動員させなければならなかった。

30分ほどすると、雷は遠ざかっていき、雨もずいぶん小降りになった。その頃になってようやく、優は俺の腕を放してくれたのだった。

ちなみにその間、優の連れている犬は、雷が鳴っている間もおとなしくお利口に お座り のポーズでじっと静かにしていた。

……おい優、おまえ犬に負けてるぞ。

さて。雨もだいぶ小降りになってきたので、俺は帰ることにした。本音を言うともう少し優と一緒に居たかったのだが、このままだと親に怒られそうな気がした。一応家のテーブルの上に『ちよつと散歩に行つてきます。9時頃戻ります。 暦』という書き置きを残しておいたのだが、時計を見ると今は9時30分を指し示している。

……過ぎてるじゃん。とつとと帰らないと。

「ごめん、優。そろそろ俺、帰るぜ」

「え、もう?」

「おう。そろそろ帰らないと親に怒られる」

「…そう、なんだ……」

なぜか残念そうに言う優。多分話相手が帰ってしまうので残念がつているのだろう。

「んじゃ、また明日な!」

「あ、そ、その、暦君!」

帰ろうとしたところに声をかけられる。

「うん?何かな?」

「えつとその、私と一緒に帰らない?」

その願ってもない誘いに、

「おー、じゃあそうするか」

俺は条件反射的に返事をしてしまう。

傘を開きつつ、2人で東屋を出る。もうほとんど雨は降っていなかった。そしてとうとう止んだ。俺は傘を閉じる。どんよりとした曇り空の合間から、僅かに陽の光が射し込んでいる。

「ほら、見て暦君！」

優の指差す方向を見ると、

「虹だよ！」

鮮やかな七色の大きな橋が空に掛かっていた。

— f i n —

## Another Daily - One day of rainy season

さて、いかがでしたでしょうか？ギャグ主体のDailyとはまた違うノリの作品でしたが。DailyとAnother Dailyが対を成すように、竜也と暦もまた対になるキャラクターです。その辺りも味わいながら（？）お楽しみ下さい。

久しぶりのAnother Dailyです。

今回は、前話から一ヶ月と少しが経過した頃のお話です。

始めて味わう不可解な気持ちに戸惑う暦君。さて、その気持ちの  
正体は……？

あと、今回はさりげなく水着回です。

クオリア、という言葉を知っているだろうか。日本語に訳すと、感覚質となるそうだ。このクオリア、つまり感覚質とは何なんだ、というと、モノの感じ方のようなものらしい。昔何かの本で読んだうろ覚えの知識なので、信憑性は若干心許ないものがあるけれど。

例えば話をしよう。天才的な頭脳を持った一人の人間がいる。彼は生まれてから一度もとある部屋から出たことが無く、その部屋は白と黒の2色しかない。彼は知識として赤や青といった色を知っているが、実際に見た事はない。そんな彼がある日、生まれて初めて赤いトマトを見た。果たして彼はそのトマトの色を赤と判断できるだろうか……？

詰まる所、クオリアとは感じ方ということであり、それは人により異なる。トマトの赤は、観る人により異なる。また、観たことの無いものは、知識としては知っていたとしても本質を知っているわけではないのだ。

さて。だらだらとこんなことを述べたのにも、もちろん理由はある。まあつまり、俺が何を言いたかったのかというと、知らないモノを本質的に知覚するのは困難である、と言ったところだろうか。さあ、物語を始めよう。これは、俺の片想いの物語。

俺が彼女のことを意識するようになったのは、何時からだっただろうか。少なくとも、高校一年生の梅雨のあの日の一件が少なくない影響を及ぼしているであろうことは間違いないだろう。

しかし、恋というほどの恋を経験したことの無い俺にとっては、

この想いは不可解なバグのようなモノでしか無かった。

余談ではあるが、俺の初恋の相手は華だったりする。俺と華はいわゆる幼なじみというやつで、小学生の頃、あいつのことが好きだった。まあ、ぼんやりした好意で、今思うと本当に幼稚な恋だったのだが。

それ以後、俺は恋というものをしたことが無い。

7月になり、梅雨も明けたある日。俺達、成華学園演劇部のメンバーは、期末試験後の試験休みを利用して皆でプールに来ていた。市民プールではなく、と○まえんのプールである。まだ7月だから、そこまで混んではない。

何でこうなったのか？答えは簡単、女子が

「皆でプール行こうよ！」

と言いだしたからだ。

男子は、女子には勝てない。これは、絶対的な真理。特に演劇部のような、男女比2：8の状況下では。

早々に着替えを終えた俺と神崎先輩は、所在なく女子が着替え終わり更衣室から出てくるのを待っていた。神崎先輩は、二つ上の男の先輩だ。音響のプロのような人で、微妙に職人気質なところもある。何と言つか、ストイックという言葉が似合う人物だと思う。

何となく手持ち無沙汰な時間が流れていく。

沈黙が続く。

そんな時、ぽつりと神崎先輩が言った。

「…なあ、神林。スクール水着について、どう思う?」

「ゲフンゲフン!」

この人、こんな人でもある。

「…大丈夫か?」

「唐突すぎたので、思わずむせました」

いきなり何を言いだしますかね、この人は。

「…すまん。…で、答えは?」

どうやら答が聞きたいらしい。俺は素直に答えることにした。

「素晴らしいモノだと思います!」

神崎先輩はにつこりと笑って右手を差し出してきた。俺も同じようにして、がっちりと握手を交わす。言葉に出来ないぐらいの密度の絆で結ばれた気がした。

そんな事をしていて、

「はい、お待たせ!」

竹崎先輩の声がした。振り向くと、部長である竹崎先輩をはじめに、演劇部の女子が勢揃いしていた。水着も、ビキニやワンピースタイプ、パレオ付きなど様々だ。

…スクール水着は、いなかった。

いや、まあ閑話休題。

華は腰にスカート状のフリルの付いた、ビキニタイプの派生系みたいな水着だった。色は黄色。

一方優は、白のビキニを着ていた。いや、何というか、純白っていう感じだ。清らかな白、みたいな。

眼福。

来てよかった。

「……こ、暦君？……どこか変……かな？」

俺がじーっと見ていたからか、優が言った。恥ずかしいのか、少しもじもじとしている。

「あ、いや、そうじゃなくて……」

まあ、実際には見惚れていたのだが、そんな事をわざわざ教えてやるつもりもない。梅雨のあの日の二の舞は御免だ。

「……………」

思い出したら、少し頬が熱くなった。

「……………？どうしたの？」

心配してくれたらしい。

「いや、何でもない」

「そう？」

なぜだか、変に優の事を意識してしまう。このもやもやとした不可解な感情は、慣れることが無い。

この感情の正体は、一体何なのだろう。

「おーい、その男子共！っ！早く来！っ！いつ！」

竹崎部長がプールの中からこちらに手を振っていた。

「そう思うんなら、荷物運ぶの手伝ってくださいよ！」

「えー？だって、荷物持つのはオトコノコの仕事でしょ？」

「……………くそう」

反論する気はない。言ってみたただけだ。……期待なんて、してなかったさっ！

神崎先輩と2人で、何とか全員分の荷物を運び終わると、

「ほら早く！もう終わっただんでしょ？」

「……ああ」

「終わりましたよ。これで終わりですよね？」

「うん。ご苦労様！」

きらきらと輝くような笑顔で竹崎部長が言った。その笑顔に、少しだけ苦勞が報われた気がした。

何というか、実に人を動かすのが巧い人だ。

ということで、ようやくプールに入る。荷物運びが既に重労働で、準備体操は必要無いぐらいの運動量だったため、準備体操は省略。むしろ荷物運びの前に準備体操が必要だった気はする。

今日は雲一つ無い、は少し言いすぎだが晴れで、絶好のプール日和だ。流れるプールにざぶんと入り、そのまま流れに沿って潜水する。

ちなみに神崎先輩は荷物番をするそうだ。楽しんでこい、と言われた。

水が冷たく、気持ち良い。10メートル程泳ぎ、息継ぎをする。息継ぎなしでここまで泳げるのは、流れるプールならではだ。

「ふう……」

華や優はさらにこの先だ。もう一度水に潜り、水を蹴り進む。ようやく他の皆の背中が見えた。

「遅いわよ、暦！」

「誰の荷物を運んでたと思ってんですか！」

「あたたちのよ、当然でしょ？」

何をバカな事言ってるの、と言わんばかりに俺を見る竹崎部長。当然なのか。

「で？神崎はどうしたのよ？」

「荷物番やってます」

「そう。呼んでくるわ」

そう言う竹崎部長はプールから上がり、荷物を置いてある場所へスタスタと歩いて行ってしまった。

女子はそれぞれ、お喋りをしている。

……俺、どうすりゃいいの？なんか、物凄い場違いな場所にいる気がして仕方がない。

「……………」

俺は無言でその横を擦り抜け、泳ぎ去った。

しばらく泳いだところで泳ぎを中断し、仰向けになりしばらく流れに身を任せる。

太陽の光に目を細めつつ、空を見る。

夏の晴れの空は、透き通るように綺麗で、そこに浮かぶ軟らかそうな真白い雲と共に俺の遠近感を狂わせる。水面にぶかぶかと浮かびながら、今ならあの空の雲もつかめるかも知れない、と思い、青空に右手をのばす。

あとちよつとで指先が届きそうでも本当は全然そんなことはなくて、俺ののばしたこの右手と雲との間には厳然たる距離があるわけ。

目の前に広がる青空を見ると、脈絡の無い思考の海の中に意識を揺蕩わせたまま、何時までも流されていくのも悪くないかな、等と思ってしまう。

そのままぼんやりしていると、

「暦君？」

「——ッ！？　うわっぷっ！？」

「だ、大丈夫！？」

「な、なんとか……」

突然優が現われた。びっくりして溺れかけてしまった。危ねえ。

「それはそうと、どうしたんだ？こんなところに一人で。他の先輩達とか華は？」

「皆一緒に、さっきと同じ辺りにいるよ？」

「……そうか」

そういう事を聞きたかった訳では無いのだが。

「で、優は？」

「え？私？」

「そつだよ。何で一人だけこっちに？」

「あゝ、えつとね……。あ、もしかして私がいたら、迷惑だった？」  
「いや、そんな事はないけど」

そうやって上目遣いに俺を見ながらそういう事を言わないで欲しい。破壊力抜群すぎる。

「そう、よかったぁ……」

そう言って、ホッとしたような表情を浮かべる優。その笑顔に、俺の心臓の鼓動が早くなったのが解った。

話す事が無くなってしまい、手持ち無沙汰な状態になる。沈黙が場を支配する。誰か助ける。期待はしちやいないが。

この沈黙の所為で、いつも以上に優の事を意識してしまう。さりとして特段これといってすることも無いため、さっきまでと同じように、仰向けに水に浮き、水の流れるがままに流される。すると、優も同じように

「あ、あわわわわっ!？」

……出来なかったみたいだ。溺れてるし。

「ほら、掴まれよ」

右手を差し出すと、優は何とかそれに捕まって体勢を立て直した。

「暦君、器用だね……？」

「そうか？」

「私、浮き輪取ってくるね」

優はそう言っ、プールサイドに上がる。

「俺も飲み物買ってこよう」

ついでに俺もプールから上がり、タグを持って売店に行く。

「優、何か飲まないか？奢ってやるぜ」

「え、いいの？」

「おう」

「本当に？じゃあ、ＣＣＯモンがいいな」

「オッケー。買ってくる」

そう言っ俺たちは一度別れた。

としま○んのプールでは入場時にタグを渡されて、ドリンクやアイスクリームと言ったものを買う際にはそのタグを専用の読み取り機にタッチさせ、帰る際に一括して代金を支払うシステムになって

いる。

コーラとCCレオンのMサイズを買い、荷物を置いてある場所へと歩く。浮き輪も含めて、先ほど俺と神崎先輩の二人で運んだのだ。その途中で、優を見つけた。浮き輪に空気を入れる機械（電動式、正式名称不明）を使い、浮き輪に空気を入れていた。

「大丈夫か？ 大変なら替わるけど」

「大丈夫、大丈夫。これぐらい、余裕だよ」

「そうか？ ならいいが」

そのまま、優の隣で浮き輪に空気が入っていく様子を見ていた。やがてそれも終わり、二人で歩き出す。一度荷物を置いてある場所へと戻り、休憩することにしたのだ。

二人で歩いていると、今まで以上に優のことを意識してしまう。

…何だっというんだよ、全く。不可解なこの感情に、若干の苛立ちを覚える。

荷物を置いてある場所へと戻ると、俺と優はビニールシートの上に座り、それぞれ喉の渇きを潤す。さすがに全部は飲みきれなかったので、蓋をしてクーラーバッグの中に仕舞う。クーラーバッグ、持ってきて良かった。

「優の分も一緒に仕舞っておこうか？」

「あ、おねがい」

「りょーかい」

水分補給も終えたところで、再びプールへ――。

「……次、どこ行く？」

「うーん、波のプールにする？」

「よし、そうするか」

ザザーン、ザザーン。岸边に、波が打ち寄せる。

「…海みたいな感じだな」

「そうだね」

しばらく、波に揺られてぼんやりとしている。ちなみに優は、浮

き輪に座っている。楽しそうだな。

…さあて、どうしたものか。何か会話を続けな<sup>い</sup>といけ<sup>ない</sup>のだが、話すネタに困る。

ちらり、と横目で優を窺<sup>う</sup>と、ば<sup>つ</sup>ちりと優と目が合<sup>っ</sup>てしま<sup>っ</sup>た。気<sup>恥</sup>ずかしくなり、二人で慌<sup>て</sup>て目線<sup>を</sup>逸<sup>ら</sup>す。

これじゃあまるで、恋人同士みたいじや<sup>ない</sup>か。

恋人同士、ねえ……。

俺には似合いそうもない感じの言葉だ。

しかしまあ、この胸のちくちくするような違和感は、恋愛感情だとすれば説明が付くのだろう。

でもなあ。何となく、それを認めてしまつのは負けたようで嫌だ。

そして、あつという間に時は過ぎて。

俺と神崎先輩は、二人で再び女子の着替えを待っていた。今は午後5時になるちよつと前。

あの後も何故か優は俺の後を付いて回ったので、結局今日の殆どは優と一緒に居たことになる。

まあ、悪くなかった。それなりに楽しかったし。

女子たちが出てきたので、皆でとし〇えんを後にする。

としま〇んを出たところで、それぞれの岐路に別れる。

優と一緒に帰ろうとしたところで（実は家がそこそ近くにいるのだ）、矢部先輩に引き止められる。

「そうだ、神林くん？」

「何です、矢部先輩？」

「例のアレ、準備出来たから今度調整しにおいで」

「あ、分かりました。ありがとうございます」

「いって、いって。趣味だからさ。じゃっ」

「はい、さようなら」

今のは、矢部茜先輩。一つ上の、女のガンマニアの先輩だ。

「？ ……何の話？」

「まあ、色々あるんだよ。ほら、帰ろうぜ、優」

「……うん」

まあ、それが何なのかは、その内分かるさ。それが必要となる事

態が起こらない事を祈るけれど。

二人で歩いていると、今まで以上に優のことを意識してしまう。  
ちらちらと、横目で優の横顔を窺う。動悸がする。更年期障害か？  
そんなわけあるか。

彼女の隣を歩きながら思う。

…俺は、いい加減に認めたほうがいいのかも知れない。

俺は彼女の事が、美影優の事が好きなんだと。

近くにいるだけでドキドキして、頭ん中真っ白になるぐらい、優の事が好きなのだ。

六月のあの時から、いやもしかしたらそのずっと前から、彼女に好意を抱いていたのだと。

この、胸に燦るもやもやとした想いは、紛れもなく恋心であると。

俺はいい加減、今までは思ってもみなかったこの事を、認めたほうがいいのかも知れない。

「はははっ」

思わず笑い出してしまった。こんな簡単な事さえ分からなかったなんて。なんて道化だ。滑稽が過ぎる。

「？ どうしたの？急に笑いだして」

「いや、何でもない。ちょっと、こつちの話だ」

「そう？まあ、いいや。暦君、この後予定は？」

上目遣いで、優がこちらを見る。

「や、特に無いな」

そう答えると、

「じゃあ、ちよつと寄り道していい？」  
悪戯っぽくそう言った。

優が連れて行った場所は、神社だった。

「今日、花火大会なんだ」

道路から境内までそれなりに高さがあり、結構階段を上ったので、その分花火がよく見える。

今もまた、花火が一輪、空に散った。

「ここ、穴場なのよ。どう？」

「……すげえ。…いい場所だな、ここ」  
「でしょ？」

それからしばらく、二人で無言で花火を見ていた。

今まで俺は、特定の誰かに対して、これほど強い恋愛感情を抱いたことは無かった。

クオリア、つまり感覚質の話を覚えているだろうか。

知らないモノを本質的に知覚するのは困難である、という事が言いたかった訳だが、この想いの正体が分からなかったのはそのクオリアの所為ではないのか、と思ったのだ。

曰く、観た事・体験した事の無いものは、知識としては知っていたとしても本質を知っているわけではない、と。

これから、この想いがどこに向かい、どんな結末を迎えることになるのかは俺には分からない。それでも、たとえどんな終わりを迎えようとも、俺は後悔だけはしないだろう。

〈 F i n 〉

ストックがあったので…一日二本投稿、やっちゃいました  
どうも、斎藤一樹です。

唐突ですが、暦君の「クオリア」の解釈は微妙に間違っています。  
作中で本人も言っていた通り、彼はうる覚えでしかこの話を覚えて  
いません。いや、例え話の内容は合っているのですが、その解釈が  
間違っていました。興味のある方はウィキペディア等で調べてみて  
ください。

さて、水着回とか言っておきながら碌な水着の描写がなく、すみ  
ませんでしたと謝罪の言葉を述べておきます。でも、多分この物語  
は終始こんな感じのような気も。

あと、作中で暦達が遊んでいたとし。えん、閉園になるそうです  
……。ぎゃあ。勿体ない。

それではまた。次はDaily辺りの更新になりそうです。

A n o t h e r D a i l y ~ G e t r e a d y f o r f u t u r e ~

更新履歴見たら、二ヶ月も更新止まってました……。ごめんなさい。

何か大切なものを守るためには、何かしらの力が必要だ。その力は武力であつたり経済力であつたり、はたまた権力であるかもしれない。

何の力も無い俺は、手っ取り早く武力を求めた。この力で彼女の事を護りたい、そう思った。

演劇部のメンバーでプールに行つてから一週間後の日曜日。俺は矢部先輩の家へと来ていた。

理由は簡単、俺専用の銃（武器）を作つて貰うためだ。俺の専用の銃のリクエストを聞かれた時に矢部先輩に頼んだことは二つ、「高い汎用性」と「強力な威力」だ。

書いてもらった地図を参考に、先輩の家を探す。程なくして見付かった彼女の家は、至つて普通の一軒家という感じだった。

少々緊張しながら、インターホンを押す。

「はい、どちら様でしょう？」

待つこと数秒、年若い女性の声が返つて来た。意味も無くドギマギしながら、微妙に上擦つた声を上げる。

「成華学園演劇部の、神林暦と言います。茜さんに招待されました」挨拶としてはこれで問題無い筈だ。テンパつて変な事を言つたりもしてないし。

数秒の後、

「はい、ちょっと待つて下さいね」

俺の心配をよそに、声が返つて来た。言われた通りに玄関で待つ。「お待たせしました。どうぞ」

それからすぐにドアが開いて、大学生くらいのお姉さんが顔を出した。矢部先輩のお姉さんだろうか。

殆ど待ってないですよ。心の中でそう返し、靴を脱いで上がらせてもらう。

そして、

「ちょっとここで待ってて下さいね？」

一つの部屋に案内された。

「ごめんなさいねえ、いま茜は出掛けてるのよ。もうすぐ戻ると思っただけど……」

…なんですと。流石に想定外。微妙に気まずい沈黙が場を支配する。

「えっと……取り敢えず貴女の名前を聞いても良いですか？俺の名前は神林暦。茜先輩の後輩です」

名を名乗るときは自分から。基本である。

「私は茜の姉の矢部若菜やべわかなよ。よろしくね、こよみくん」

なんか声が弾んでる。楽しそうだな。

さて、どうしよう。会話の話題が無い。女子大生と共有出来るような話題なんて、持ち合わせが無い。

「因みに、ご趣味は？」

これで話題が何とか出来ると良いのだが。

「うーん、料理と読書と、」

おお、見かけ通りおしとやか

「サバゲーね」

ではなさそうだ。人間、見掛けだけで判断してはいけない。

共通の話題には持っていそうにない。どうしよう。表面上はポーカーフェイス、内心は冷や汗がどつと吹き出てる。今の俺の状態はそんなところだ。

その時、

「ただいま」

矢部先輩が帰って来てくれたらしい。ナイスタイミング！

数分後、俺とメールアドレスを交換して、若菜さんは部屋を去って行った。入れ替わりに矢部先輩が部屋に入ってくる。その手に持っているのは、大きなトランク。

「先輩、そのトランクって……」

「うん、道具とか銃とか」

銃といってもエアガンである。念のため。先輩はそのトランクを床に下ろし、自分も床に置いたクッションの上に座り込む。「えつと、オーダーしてきたのは、『汎用性の拡張』と『威力の強化』だったよにやー？」

「はい」

トランクを開け、中をこそそと弄りながら矢部先輩が確認してくる。

「と、とつとと……。うん、取り敢えず、まずどのぐらいの射撃能力か見てみたいから、外出て撃ってみようか」

トランクを一度閉じ、矢部先輩が言う。頷き、俺も立ち上がる。

「あ、そのトランク、俺が持ちますよ」

そう言っ、トランクを手にする。うーん、俺にとってはそれほど重くもないが、女子である先輩には大変だろう。

「ありがとう」

そう言って手をひらひらと振りながら、先輩は先に立って歩き出

す。それに付いていく俺。

そして。

「ここよ」

案内された場所は、裏手にある空き地だった。空き地の形は長方形、そして矢部先輩は無造作に積んであるコンクリートブロックの上に空き缶を並べていく。

「はい曆クン、そこから五歩前に歩いて」

言われた通り歩いてみる。

「うんうん、いい感じ。じゃあ、そこからこれでこの空き缶撃ってみて」

言いながら、拳銃を手渡してくる。

「……これは？」

「それはベレッタM92F。米軍でもM9として正式採用されている優秀な拳銃よ。」

「なるほど」

個人的には緋弾○アリアのベレッタ・キンジカスタムのベース機としてのイメージのほうが分かりやすい。

「んじゃ、やってみようか？」

「了解です」

両足を肩幅に開き、両手をまっすぐに伸ばし、ベレッタを構える。

「……目標を狙い撃つ！」

やっぱり、銃撃つときの掛け声といえこれだろう。

素早くすべての的の位置を確認し、一息に連射して全弾命中させる。

「……おー、やるねえ。まさかいきなり全弾命中とは、おねーさんピツクリだよ」

感心したように矢部先輩が言う。良い意味で期待を裏切ることが出来たらしい。

「じゃあ、次はこれ使ってみて」

そう言って矢部先輩が差し出して来たのは、アサルトライフルだ

つ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0720w/>

---

Another Daily

2011年11月16日03時23分発行